

悠久の京を訪ねて Part VI Vol.1



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

Part VIでは京都府内で見つかった、ものづくりに関する遺跡を紹介します。

うつわを焼く

■朝鮮半島から伝わった「やきもの」の技術

今から1,600年前の古墳時代中期に、朝鮮半島から新しいやきもの技術が伝わりました。朝鮮半島では陶質土器と呼ばれ、中国の灰陶にその起源が求められます。日本国内では、このような灰色の硬質の土器を須恵器と呼び、いち早くヤマト王権が大阪府南部の丘陵に所在する陶邑古窯址群で大規模に生産を始めました。

■「陶邑」から「篠」へ

藤原京や平城京では、陶邑古窯址群の須恵器が数多く使われましたが、長岡京や平安京では、陶邑産の須恵器は著しく減少し、それに代わって亀岡市篠に所在する篠窯で焼かれた須恵器が使われるようになります。急激に生産地が変わった背景には、250年ほど続いた陶邑古窯址群で粘土や燃焼となる薪が枯渇したことなどがあげられますが、



あながま
篠窯跡群で見つかった窰窯
(天井が残っていました)

篠窯跡群



篠窯の方が長岡京や平安京に地理的に近く、桂川の水運により効率的に輸送できたことが大きな要因だったようです。篠窯跡群では、1976年から1986年に京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した発掘調査により、奈良時代から平安時代にかけての須恵器生産の様子が明らかになりました。

亀岡盆地では、飛鳥・藤原京の時代に観音芝蔴寺などの古代寺院が造営され、篠窯はそれと同時期に操業され始めました。奈良時代になると丹波国分寺・国分尼寺、そして、丹波国府が造営され、それに連動して篠窯での生産量も増加しました。その後、都が平安京に遷ると、須恵器生産は本格化し、国内最大級の生産地となります。篠窯の須恵器は、都を通して国の迎賓館である福岡県の鴻臚館をはじめ、全国の公的な施設や集落にまで流通しました。

百数十基以上の窯跡が存在する篠窯跡群は、当時の国家的な生産体制を考えるうえで重要な遺跡といえます。



篠窯跡群で生産された須恵器